

Renewal of Psychiatry Clinic by Design Workshop

1.背景と目的

高度情報化, 少子高齢化など, 社会情勢が大きく変化するなかで, コミュニケーションのとりにくい職場環境がストレス社会を生み, こころの問題が顕在化している。ストレスケアを対象とし, 地域社会に貢献する, 開かれた専門的医療機関への需要はますます増しており, 近年の課題を考慮した空間づくりが求められている。

一方, 都市計画においては, 多くの課題を空間づくりに活かすため, 利害関係者の意見を取り入れる「ワークショップ方式」が定着しつつある。

不知火病院(福岡県大牟田市, 1950年6月開設)は, ストレスケアセンター「海の病棟」(1989年12月)を有するうつ病治療専門施設として, 様々なこころの問題に専門的に取り組む医療機関として, これまで地域社会に貢献してきた。不知火クリニック(福岡市博多区, 1988年4月開設)は, 都心に設置された不知火病院分院であり, メンタルヘルスの早期解決を目指し, 抵抗感なく気軽に相談できる施設として, 医療活動の実績を築いてきている。不知火クリニックは, 開設から19年を経て, 患者数増加に伴うスペース不足や動線の複雑化を解決するために, 診察環境改善と業務円滑化に向けた改修を実施することとなった。

本論は, 不知火クリニックの改修を対象として, 医師, 事務局関係者, 建築プランナー, デザイナー, および学生によって構成するワークショップを通して, まちづくりで用いられているワークショップ方式の小規模施設計画への適用による有効性と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 枠組みと方法

不知火クリニックにおける診察環境の改善と業務円滑化のため, 2006年2月より「デザイン・ワークショップ」を実施した。デザイン・ワークショップでは, ①事例調査, ②施設の実測調査, ③患者, 医師, スタッフ等の使用状況の把握, 心理面, 機能面に関するヒアリング調査, ④患者を対象としたアンケート調査を行い, 計画上の課題を抽出し, コンセプト, プラン, デザインに関する検討を行った。

2.1 対象

デザイン・ワークショップの対象は, 不知火クリニック(福岡市博多区)である。博多駅前に立地し不知火病院が所有する由布ビル(696m², RC構造 7階建て, 1999年1月)の3階及び4階部分の合計226m²を占める。由布ビルは, フロント部にエレベータ, もう一方の端部に外部階段を有するテナントビルであり, 不知火クリニックは, この建物の主要テナントとして設計された。ファサードは, 柱を強調させた基壇部(1~2階), タイル貼りの中層部(3~5階), 勾配屋根鋼板葺きの上層部(6~7階)の3層からなる。不知火クリニックは, 4階部分を診察に, 3階部分をデイケアに使用していたが, 2006年7月に3階のデイケアフロアを閉鎖し, 3, 4階を改修して全体を診察スペースとして使用する方針を決定した。

2.2 デザイン・ワークショップのメンバー

デザイン・ワークショップのコアメンバーは, 不知火病院院長と常務理事の2名, 大学教員2名, 民間デザイナー1名, 学生2名の計7名である。必要に応じて, 看護師や施工会社メンバーが参加した。

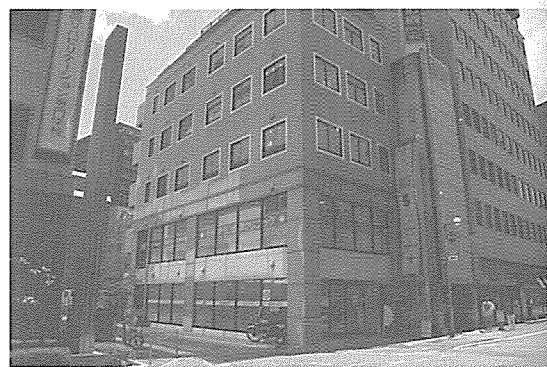


写真1 由布ビル(福岡市博多区)

表1 デザイン・ワークショップ・コアメンバー

徳永雄一郎	不知病院院長
坂口民生	医療法人新光会常務理事
佐藤 優	九州大学大学院芸術工学研究院教授
坂井 猛	九州大学大学院工学研究院助教授
徳永 礼	デザイナー
坂口真弓	九州大学大学院人間環境学府修士課程
長井弓枝	九州大学大学院芸術工学府修士課程